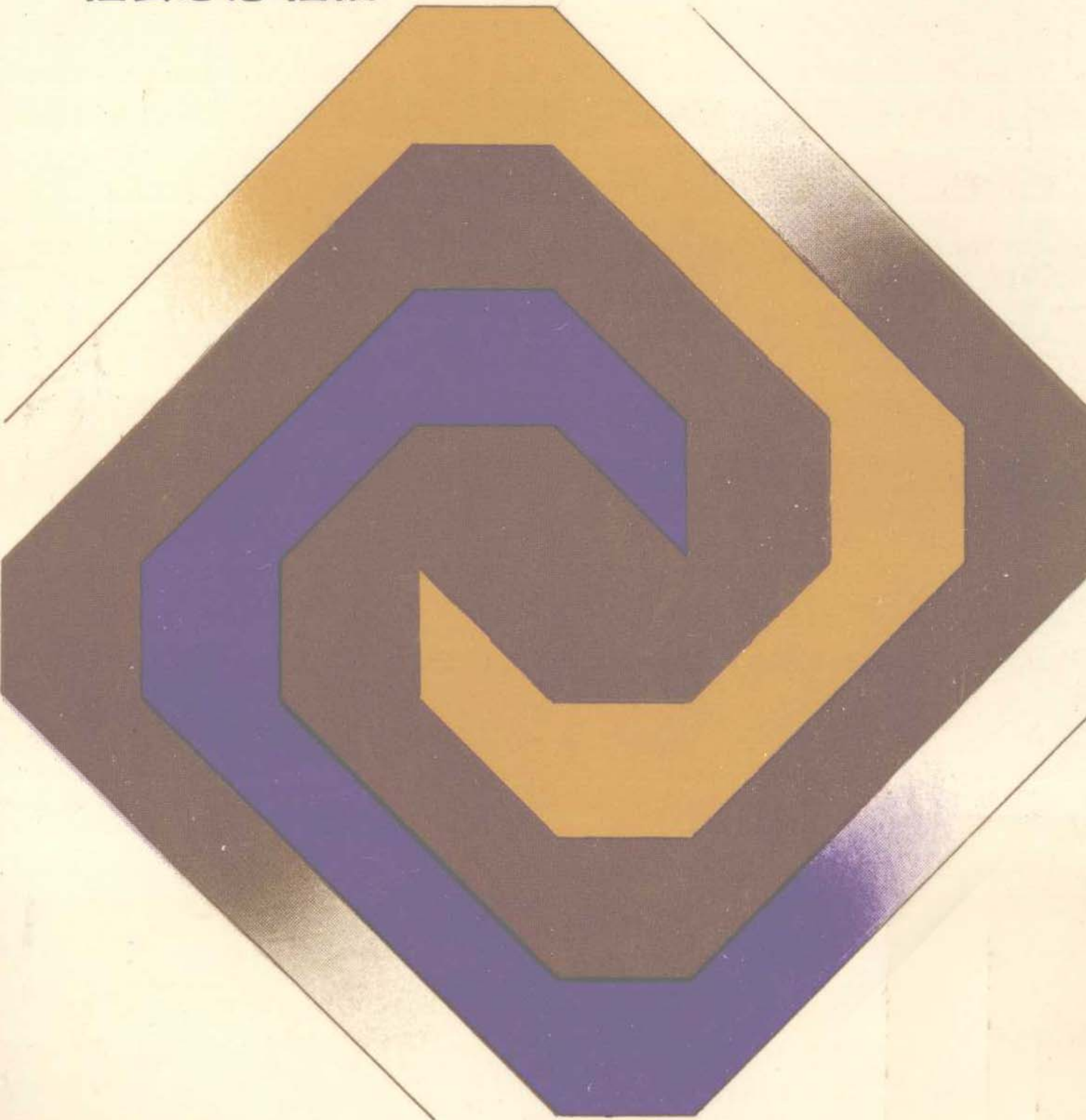


人生を考える

漱石のことば

社会思想社編



現代教養文庫 592 人生を考える 一漱石のことば一 © 1967

昭和 42 年 3 月 30 日 初版第 1 刷発行



編 者	社 会 思 想 社
発 行 者	土 屋 実
本文印刷	株式会社双文社印刷所
製 本	合資会社黒田製本所

発行所 株式会社 社会思想社
東京都千代田区神田駿河台 3-5
電 話 代 表 (292) 2 6 1 1
振 替 東 京 7 1 8 1 2

担当 八坂安守 土屋正躬

落丁乱丁は直接小社にお送り
下さればお取替えいたします

現代教養文庫の定価はすべて
カバーに明記してあります

現代教養文庫

592

人生を考える

—漱石のことば—

社会思想社編

社会思想社刊

人生を 考える 目次

I 若い人へ

青年に与う……………	8
学ぶこと・学ぶひと……………	16
文学と芸術……………	21
日本と西洋……………	29
過去と現在……………	32
処世断章……………	46

II 人生について

世の中をみつめる……………	54
愛の意味……………	60
苦悩すること……………	65
恋について……………	76
職業と金……………	85

疎外と人間	92
厭世観	104
生と死	108

III 人間とは何か

自己を考える	116
他人を思う	120
人間とは何か	126
女について	139
仮面	143

IV 折々に

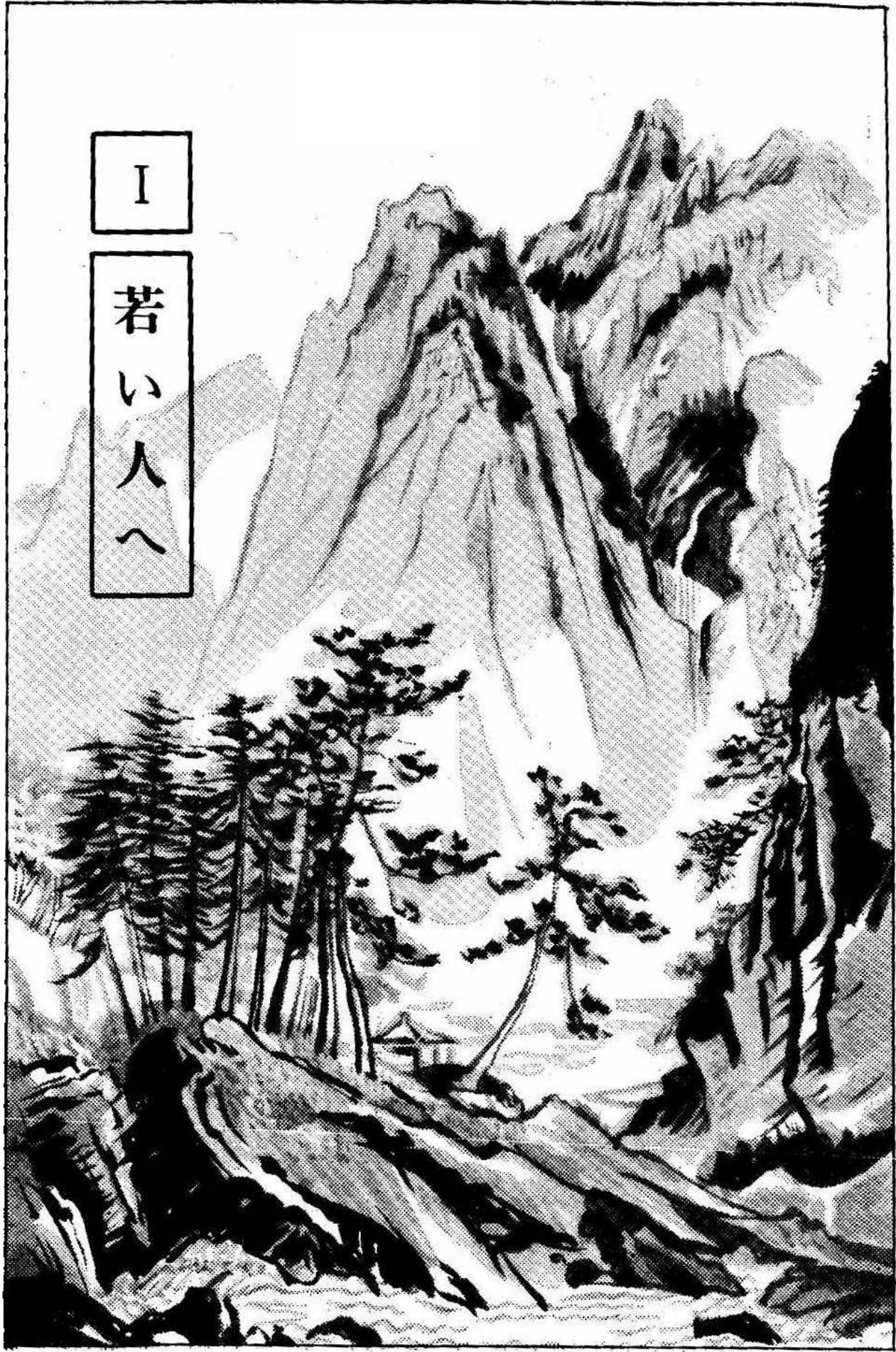
折々に	150
私は	152

漱石の考え方
漱石年譜

瀬沼茂樹
160

I

若い人へ



青年に与う

あせっては不可^いません。頭を悪くしては不可ません。根氣ずくでお出でなさい。世の中は根氣の前に頭を下げることを知っていますが、火花の前には一瞬の記憶しか与えて呉れません。うんうん死ぬ迄押すのです。それ丈です。決して相手を拵らえてそれを押しちゃ不可ません。相手はいくらでも後から後からと出て来ます。そうして吾々を悩ませます。牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなから申します。人間を押すのです。

*

牛になることはどうしても必要です。吾々はとかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです。

*

無暗にあせっては不可ません。ただ牛のように図々しく進んで行くのが大事です。

△同▽

△芥川竜之介・久米正雄への書簡▽

我々に必要なのは理想である。理想は文に存するものでもない、絵に存するものでもない、理想を有して居る人間に着いて居るものである。　　△文芸の哲學的基礎▽

理想とは何でもない。如何にして生存するが尤もよきかの問題に対して与えたる答案に過ぎん。　　△同▽

「御母^{おつか}さんの言う事は成^{なる}べく聞いて上げるが可^よい。近頃の青年は我々時代の青年と違って自我の意識が強過ぎて不可^{いけ}ない。吾々の書生をして居る頃には、する事為す事一として他^{ひと}を離れた事はなかった。凡^{すべ}てが、君とか、親とか、国とか、社会とか、みんな他本位であった。それを一口にいうと教育を受けるものが悉^{ことごと}く偽善家であつた。其偽善が社会の変化で、とうとう張り通せなくなった結果、漸^{ぜんぜん}々自己本位を思想行為の上に輸入すると、今度は、我意識が非常に発展し過ぎて仕舞った。昔^{むかし}の偽善家に対して、今は露悪^{ろあく}家計^{けい}りの状態にある。——君、露悪家という言葉^{ことば}を聞いた事がありますか」

△三四郎▽

自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴に使うようですが、其中には甚だ怪しいのが沢山あります。彼等は自分の自我を飽迄尊重するような事を言いながら、他人の自我に至っては毫も認めていないのです。苟しくも公平の眼を具し正義の觀念を有つ以上は、自分の幸福のために自分の個性を發展して行くと同時に、其自由を他にも与えなければ濟まん事だと私は信じて疑わないのです。我々は他が自己の幸福のために、その個性を勝手に發展するのを、相当の理由なくして妨害してはならないのであります。

△私の個人主義▽

*

それで私は常から斯う考えています。第一に貴方がたは自分の個性が發展出来るような場所に尻を落ち付けべく、自分とぴたりと合った仕事を発見する迄邁進しなければ一生の不幸であると。然し自分がそれ丈の個性を尊重し得るように、社会から許されるならば、他人に対しても其個性を認めて、彼等の傾向を尊重するのが理の当然になって来るでしょう。それが必要でかつ正しい事としか私には見えません。自分は天性右を向いているから、彼奴が左を向いているのは怪しからんというのは不都合じゃないかと思うのです。尤も複雑な分子の寄って出来上った善悪とか邪正

とかいう問題になると、少々込み入った解剖の力を借りなければ何とも申されませんが、そうした問題の關係して来ない場合もしくは關係しても面倒でない場合には、自分が他から自由を享有している限り、他にも同程度の自由を与えて、同等に取り扱わなければならん事と信ずる外に仕方がないのです。

△私の個人主義▽

汚れたのをを用いる位なら、一層始から色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ。

△こゝろ▽

下層社会の女などがよくあの人は様子が宜いということを言うが、様子が宜い位で女に惚れられるのは、男子の不面目だ。

△模倣と独立▽

悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。

△こゝろ▽

「御前は、どういふものか、誠実と熱心が欠けている様だ。それじゃ不可ん。だから何にも出来ないんだ」

「誠実も熱心もあるんですが、たゞ人事上に応用出来ないんです」

「何ういう訳で」

代助は又返答に窮した。代助の考えによると、誠実だろうが、熱心だろうが、自分が出来合の奴を胸に蓄わえているんじゃないやなくて、石と鉄と触れて火花の出る様に、相手次第で摩擦の具合がうまく行けば、当事者二人の間に起るべき現象である。自分の有する性質というよりは寧ろ精神の交換作用である。だから相手が悪くっては起り様がない。

「御父さんは論語だの、王陽明おうようめいだのという、金の延金のへがねを吞んで入らっしゃるから、左様いう事を仰しゃるんでしよう」

「金の延金とは」

代助はしばらく黙っていたが、漸ようやく、

「延金の儘出て来るんです」と言った。

△それから▽

自ら以て高しとす是自ら卑しとするなり自ら以て得たりとす是未だ得ざるを示す。

△断片▽

知らざるを知らずとす是知らざるなり知らざるを知るとす飽くまでも知るなり。

△断片▽

凡ての安楽は困苦を通過せざるべからず。

△吾輩は猫である▽

やろうと思わなければ、横に寝た箸を豎にする事も出来ん。

△虞美人草▽

口多き時に真^{まこと}少なし。

△同▽

冷^{ひやや}かな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きて
いる。

△こゝろ▽

若い人がよく失^{しくじ}敗ると言うが、全く誠実と熱心が足りないからだ。

△それから▽

友達ハ絶対に要ラナイモノニアラズ。時ニヨリテ厄介ニナルナリ。重荷ヲ負ウテ

旅行スルガ如シ。脊負ツテ居ルウチハ厄介、宿ニ着ケバ役ニ立ツ。

△断片▽

一体少し学問をして居ると兎角慢心が萌もすもので、其上貧乏をすると負け惜しみが出ます。

△吾輩は猫である▽

眼だけ高くって、外ほかが釣り合わないのは手もなく不具かたわです。

△こゝろ▽

相談は一人一人に限る。大勢寄ると、各自めいめいが自分の存在を主張しようとして、稍ややともすれば異いを樹たてる。それでなければ、自分の存在を閑却された心持になって、初手しよから冷淡に構える。相談はどうしても一人一人に限る。其代り暇ひまは要る。金も要る。

△三四郎▽

咄嗟とつさの機きが過ぎて、頭ひややが冷かに働き出した時、過去を顧みて、ああ言えば好かつた、斯うすれば好かつたと後悔する。

△同▽

針を海綿かくに蔵して、ぐっと握らしめたる後、柔らかき手に膏藥こうやくを貼って創口きずぐちを快

1 若い人へ

よく慰めよ。出来得べくんば唇を血の出る局所に接けて他意なきを示せ。

△虞美人草▽

